

加 齢 と 衣 環 境 (2)

海を渡った人たち —その1—

金 森 範 子

目 次

1. まえがき
2. ジョセフ・ヒコ (Joseph Heko) こと
浜田彦蔵 (1837~1897)
 - 2-1. 彦蔵、初めての洋服
 - 2-2. 髷が残っていた
 - 2-3. サンフランシスコに上陸
 - 2-4. 洗礼と帰化
 - 2-5. ハワイ島のヒロ
 - 2-6. 洋式は古代日本様式の衣服?
3. 新渡戸稲造 (1862 ~1933)
 - 3-1. 鼓手と洋服
 - 3-2. クエーカー教徒の女性と結婚
 - 3-3. 家紋のついた着物
 - 3-4. カーライルの「サーター・レザータス」
4. 彦蔵と稲造
5. むすび
6. 年表

1. まえがき

加齢と衣環境(1)では、まず自分への警鐘をこめて、衣生活に関するアンケートを試みた。「加齢」も「衣環境」も、それぞれが大きなテーマを持ち、容易に越えることの出来ない山であることに気付いているが、私のもうひとつのテーマ、民族と衣装とも深くかかわって尽きない興味を持っている。

今回は、19世紀から20世紀前半にかけて海を渡った人々の記録を取り上げた。貴重な資料や出会いに恵まれた。

岐阜県揖斐郡出身で、1934年仏教開教使の妻としてアメリカに渡り、今も91歳でカリホニアに健在の(2000.12.31現在)、由上美枝子さんとの出会いが初めにあった。由上さんを軸に調べる内、枠がどんどんひろがったが、

ここでは次の諸氏の記録に絞った。

- ・ジョセフ・ヒコこと浜田彦蔵
(1837~1897) 60歳没
- ・新渡戸稲造 (1862~1933) 72歳没
- ・鈴木大拙 (1875~1966) 96歳没
- ・由上美枝子 (1910~) 91歳存命

私の研究の中での4氏の接点については、文中で述べていきたい。

2. ジョセフ・ヒコ (Joseph Heko) こと 浜田彦蔵 (1837~1897)

ジョセフ・ヒコこと浜田彦蔵は、1837年(天保8年)薩摩の国、古宮村(現、兵庫県加古郡播磨町)に生まれた。取り上げた理由は、

- ①準備された渡航ではなかったが、日本人としてアメリカ国籍を取得した第1号であること
- ②1862年刊行の、彦蔵の「漂流記」上下は江戸時代出版された唯一の漂流記といわれ、衣に関する記述が多く詳細なこと
- ③帰化してから日本に戻った時の、日本人を観察する視線
- ④由上美枝子との共通点は、アメリカ国籍の取得及びサンフランシスコ、ハワイなどの足跡にあり、アメリカでの日本人の回路に興味を生じたこと

今回私が資料として多く引用しているのは原題名 The Narrative of a Japanese; What he has seen and the people he has met in the course of the last forty years: 2 vols. 「アメリカ彦蔵自伝」日本語訳中川努・山口修訳(平凡社)と、新渡戸稲造全集(教文館)。

2-1. 彦蔵、初めての洋服

1850年(嘉永3)10月、遠州灘で遭難し、2か月後に救助されたアメリカ船オークランド号でのこと。彼は次のように書いている。

「昼すこし前、次席航海士が自分の部屋から古い洋服を持ち出し、私を招いて、それまで着ていた日本の着物をぬぐように手まねをした。その通りにすると、彼はフランネルのシャツに、ラシャのズボンと布製の上衣を着せてくれた。彼が西洋人としては小柄のほうだからといっても、どれもこれも私には大き過ぎた。彼は何か白いもの(チョーク)であちこちにしるしをつけて、もう一回ぬぐように手まねをした。そうすると、それを自分の部屋に持ち帰って、裁断して縫いなおした。次の日の午後までには、完全に縫いなおしが終わり、私はもう一度着てみた。彼が見ると、私のからだにぴったり合っていた」¹⁾ 彦蔵が着物から洋服になった成り行きが分かる。布製の上衣といているから、そうではない上衣、例えば革製の上衣も見ているのだろう。ここで注目に価するのは、次席航海士が縫製をしていることである。

18世紀の末に、ミシンの原型となる裁縫機がイギリスで考案されていて、1851年にアメリカのアイザック・シンガーの考えたものが普及し、機械の転訛から裁縫機を指して「ミシン」と言うようになった。年代的に見て、このミシンが船に積み込まれていた可能性は少ないが、男性が仕立てをしていたことと、長期の航海に対し、縫製の準備があったことは確かである。日本には1901年に初めてミシンが輸入され縫製の面からも洋装への環境が整っていく。「さあ、お前はヤンキー・ボーイだ」²⁾ 「私はその時、彼が何を言ったのか分からなかったが、そのことばの音をおぼえていて、あとで、その意味が分かったのである。生涯のうちで洋服を着たのはこれが初めてだった」³⁾

「からだかひどく窮屈なように感じた。でも洋服は自分の着物よりはるかに暖かだったし

そのうえ仕事をするのに便利だった。私は頭を下げておじぎをし、こんなにも気持ちのいい服を作ってくれたことに感謝した。」⁴⁾

彦蔵の衣環境に意識の変化が起きた。この記述は1862年、つまり彦蔵25歳、遭難してから12年経っていて、彼の経過的な知識が(布の名前など)あるとしても、着心地よさと暖かさ、窮屈さと動きやすさを感じている。

2-2. 鬚が残っていた

彦蔵は、まだヤンキー・ボーイになれていなかった。「次の朝、私たちみんなが後甲板で仲間どうし話をしていると、私の新しい友人次席航海士がやってきて、私の頭を指さし、彼の毛をひっぱりながら何やら言った。彼が何をいったのだから、まるで分からなかったが、おそらく私の髪の毛が彼のよりも黒いとか、髪のかっこうが違うとか言ったのだと思って、うなずいた。私がうなずくのを見ると彼はすぐに、自分のことばに私が同意したのだと思って、部屋に行ったかと思うと、数秒後には、はさみと腰かけを持ってあらわれた。彼は、それにすわるように合図した。私がすわると、彼は私のまげを切り落とし、頭じゅうの毛を短く刈ってしまった」⁵⁾

彦蔵にとって予期せぬことが起こってしまった。洋服はよかったが、彼にとって、頭は別問題だった。

「いま、航海士からこんなふうになされてしまって、私の心は悲しみに突きおとされた。彼は親切心からしてくれたのだし、何ら悪意は持っていなかったのだが、それでも私のまげを切りとる権利はない。もう一度故国に帰ることができた暁には、神さまに供えるよう誓ったまげなのだ。しかも今、まだ願かけを果たしもしないうちに、あの異人が来てまげを切り取ってしまったのだ。」⁶⁾

彦蔵の嘆きようは、恨みがましい。言葉が通じなかったゆえの過ちと、手と口を洗い、神さまにおかした罪として、許しを乞うている。「神道は生きている者のために、仏教は死者

のためのものであった」⁷⁾とも書いている。彦蔵にはトータルとしての洋服の装いは未知の世界だった。

もうひとつ、罪として、肉食をしたことにふれている。スープに入っていたのを知らずに飲んでしまったのである。「四つ足の動物の肉を食べた者は誰でも、その時から75日間は、お祈りをしたり、お寺に詣ったり、神さまに供物をしたりすることはつつしむように教えられていたのだった。四つ足の肉は不浄なものと考えられていたからだ。」⁸⁾こうして命を助けて貰ったのに、お祈りする事も感謝する事もできないと。でも年寄り達の言葉に「知らぬが仏」という言葉があったとひとり納得する少年でもあった。

世界の民族衣裳を分類すると、衣食住のかかわりは深い。肉食の地方は革や毛の衣類が多く、お米を食べている地方は植物繊維が多い。馬鈴薯やトウモロコシを主食とする地方は、違う趣きを呈してくる。同じ中国でも南と北では主食が違うように衣装も違う。

彦蔵が育った地方は信仰があつく、言葉で慣習が伝わっている。忌み嫌う事や「村」としてのきまりが多い。救助された船の中で英語を教える貰おうとして、日本に帰ったら仲間から罰せられると聞かされ、やめようとする。そうした出発点にもかかわらず、日本人としてリンカーンに会った唯一の人になったのだから、変わっていく環境にどんどん順応していることが察せられる。

彼は、江戸の町を見ても、少年としての新鮮な記録を残している。「江戸橋をくだる途中、神奈川村と横浜という小さな漁村を通り過ぎた。」⁹⁾「その二つの村に関心をもつようなものは何もなかった」¹⁰⁾

後に彼は、ここ横浜でも活躍をしている。新渡戸稲造が結婚して妻と共に日本に降り立ったのも横浜港である。

2-3. サンフランシスコに上陸

オークランド号に救われた彦蔵は、サンフ

ランシスコに停泊した時、波止場から町に歩いていて、足を鎖でつながれた男が50人以上もいるのを見た。「これが鎖部隊と言うものだということがあとで分かった。それは囚人で構成され、みんないろいろな罪を犯したため、その刑に服しているのであった。そばを歩いて行く車をよく見れば、驚いたことに何か黒いものが荷車とか馬車を引いている。青赤だんだらのフランネルのシャツ、ダーク・ブルーのズボンといういでたちで長靴をはき、その中にズボンを突っこみ、両肩にはズボン吊りをしている。くびのまわりには赤い毛糸の襟巻を巻き、頭にフェルト帽をかぶっていた。その黒い顔、白い歯、それに大きい赤い唇は、煤にまみれたような顔と対称をなして、おそろしくてぞっとするほどであった。」¹¹⁾

こんな生きものの話は聞いたことがなかったので、「鬼」以外のなにものでもない、彦蔵は考えた。今、私たちは情報の氾濫する中に生きていて、日常の中で未知のものにぶつかることは殆どない。黒人を、その衣裳から、赤鬼や青鬼と思ったのは、それまでに得た彼の知識からであろう。私はここで、赤鬼や青鬼について課題を貰ってしまったように思った。

彦蔵が見るもの全て珍しかったように、アメリカの人達にとっても肌の色が違い変わった装いの日本人は珍しく、何者だと感じたに違いない。サンフランシスコに着いた時、航海士は、洋服に慣れはじめた彦蔵達に、元の着物に着替えるように伝えた。仮装舞踏会場に連れて行かれ、一寸した見せ物になった経験を彦蔵は書いている。華やかなダンスと騒々しい音楽に驚きながら、ここでも蝶ネクタイの給仕の黒人達を凝視していた。

2-4. 洗礼と帰化

記録を読んでいると、騙された経験はあるし、用心をすることは身につけていたと言う。17人の乗船者の中、彼だけが大きな舞台で活躍するようになったのは、彼が英語を習得し、

同化しやすい10代の若者であったことにも、起因するのだろうか。

遭難した当初、あれ程日本の神仏を恐れおののいていた彼が、1854年、信頼する知人の勧めで洗礼を受けた。その時耳ざわりがよいということで「ジョセフ」と名前を決めた。洗礼を受ける前、ボルチモアでカトリックの学校に行っていたり、第14代のフランクリン・ピアース大統領に会ったりして、すでに、彼の知的環境が変わりつつあった。

更に、1858年、中国と日本の沿岸の調査団の書記として故国に帰る前、ボルチモアで帰化証明書を取り、アメリカ合衆国の市民権を獲得した。

2-5. ハワイ島のヒロ

1852年、彦蔵はヒロに寄港している。ヒロの原住民のことを肌が黒く、黒い目で、髪はちぢれず背丈もほどほど、着物というほどのものは着ていないと書いている。

本学の語学研修がヒロのハワイ大学で行われていた時期があり、私も1990年に同行した。その時、原住民の人たちと交流を持つことが出来、彼等は土色の独特の模様の布 KAPA (Hawaiian Bark Cloth) で作った服を着てくれた。裸足で歩く人が多いので現地の人に聞くと、昔からの習慣とのことだった。キリスト教の宣教師の影響で、ハワイの人々も衣服を着るようになり、後にムームーがハワイの代表的衣装となった。

訪問したミュージアムには日本・中国・韓国・ポリネシアなどの衣裳が展示してあり、早くからのアジア民族の流入が伺われた。その時、私はまだ彦蔵の手記に出会っていなかったが、ヒロでは衣服を着る必要が無いと感じていて、キリスト教の影響説を肯定していた。キラウエア火山の延々と広がる黒い溶岩と、鮮やかに咲く花々は、あたかも死と生の対照を見るようで、自然の尊厳を感じる島であった。

ハワイの島々は又、由上美枝子の足跡をた

どることにもなった。

2-6. 洋式は古代日本様式の衣服?

1886年、日本人の欧化熱が盛んな頃、彦蔵は、神戸でダンス・パーティに招待された。「東京や大阪では日本人が外国の物や外国の風習に熱狂しているようである。そしてこの田舎町の神戸でさえ、天皇の誕生日⁽⁶⁾には知事(内海忠勝)が洋式の大舞踏会を開く予定で、それに対し県会は三千ドルの支出を決め、内外の賓客六百名を招待し、男女とも洋式で出席せねばならないのである。日本人の仕立屋で洋服について幾分でも知っている者はひどく商売が忙しい。」⁽¹²⁾「白のキッドの手袋が75銭から1円75銭に値上がりし、それだけ出してもなかなか手に入らない。」⁽¹³⁾と世相を書いている。又、洋服にて出席の命令にもかかわらず、多くは和服姿、ダンスを踊ったのも日本人では知事夫妻とひとりだけで隅の方にかたまっている者ばかり、それでも食べる時になると勇猛なる大食漢の腕前を見せ、外人と四つに組んだ、と皮肉っている。

1887年の2月中旬、海軍の軍医が神戸の日本人旅館で300人の聴衆に講演した中で、「日本の婦人がいわゆる洋式の衣服を採用すべきであること、この式の衣服は実は決して外国式なのではなく、昔の日本様式であること、そして婦人は髪を束髪に結うこと、眉毛を剃り落したり歯を黒く染める習慣をやめねばならないことを強調した。皇后が古代日本様式の衣服としてこれを着用しているのだから、庶民階級をもこの様式にしたがわせようとして、国务大臣の一人から、この講演をするように命ぜられた、と言われている…」⁽¹⁴⁾と、彦蔵は記述している。次回で再検討したい。

3. 新渡戸稲造 (1862~1933)

新渡戸稲造は、1862年9月1日盛岡市鷹匠小路で南部藩士新渡戸十次郎の三男として生まれ(幼名稲之助)、現在、肖像画が五千円

札に使われている。私が新渡戸稲造に関心を持った発端は、東海女子短期大学学監・故高橋悌三¹⁴⁾の、氏に関する講演を聴いてからである。稲造の郷里、盛岡の不来方城跡に「願わくはわれ太平洋の橋とならん」という石碑がある。私が1990年に訪れた時は、人影も少なく静かなたたずまいであった。稲造を取り上げた理由は、

- ① 6歳の稲造が新時代のいぶきを、自分の服装の変化で感じている
- ② 妻がクエーカー教徒のアメリカ人である
- ③ カーライルの「サーター・レザータス (衣装哲学)」の講演を何回も行っている
- ④ 日本国内外の広い範囲での修学と活躍
- ⑤ 武士道に秘められた精神

3-1. 鼓手と洋服

当時武士の子として「六歳になると、武士の服装一式を着け、それまでもって遊んでいた玩具の木刀の代わりに真刀を腰にさす、いわゆる着袴の儀式が行われ、それによって、武士としての資格を認められ、自らも自覚する」¹⁵⁾ 当時の情勢から外国の侵略に備えるため、藩士の子弟として軍事教練を受けさせられることになり、兄の通郎と二人、鼓手の教練を受けさせられることになった。その時の気持ちを「思い出」(英文) に述べている。

「鼓手になることは、私はとてもいやだったが、西洋では鼓手はいつも軍隊の先頭に立って、いわば軍をみちびくのだ——というのでやっと納得し、喜び勇んで鼓手になった。そして洋服というものがくるまでの十日ばかりが待ちどおしくてたまらなかった。」¹⁵⁾

洋服というもへの彼の好奇心が分かる。続いて彼は、次のように述べている。「綿入れの黒のアルパカの上着、金ボタンの付いたモヘヤの赤チョッキ、ズックのような紺色のびろうどの帯止め、真鍮のビジョーの付いた革ベルト——この異様な服装のおかげで刀をすてた時の自尊心を多少取戻しはじめ、私はこの服装の故に、一種の忠誠を持たねばならぬ

と感じた。また同時に何か知的好奇心を起した。——陽気に太鼓をたたいている間に私の幼ない頭の中には静かに変動が起こりつつあった。私はいわば旧時代の葬送行進曲を奏でていたので、ひた押しに迫る新時代のいぶきは、服装の変化とともに、はっきりと感じられるようになった。」¹⁶⁾ 迫る新時代のいぶきを感じさせるものは、彼の家庭内の中にもみられた。蠟マッチの箱・オルゴール・びろうどの箱に入った銀のナイフとホーク等、抽出しの奥深くにしまわれていて、これらの品物は、江戸留守居役をしていた父が、田舎の親戚などに見せるために持ち帰ったものらしい。さらに彼は、「この時代の私に、西洋の偉大さを示してくれたものがこのほか二つあった。一つは極くありふれた鉛筆で、もう一つは牛肉である」¹⁷⁾ と述べている。まだ、四つ足は一般に忌まれていたが、栄養があるからと、母親が食卓に供したという。

3-2. クエーカー教徒の女性と結婚

稲造がドイツに留学した折、アメリカのフィラデルフィヤで講演したことがある。その講演を聞いて、日本に興味を持ったメリー・エルキントンを知人に紹介され、1891年(明治24年)1月1日、フィラデルフィヤの教会で、双方の親族の反対を乗り越え結婚式をあげた。稲造30歳。同年の2月9日、稲造夫婦は横浜港についた。

3-3. 家紋のついた着物

結婚に反対だった叔父の太田時敏(一時期養父でもあった)ほか親戚の人々の出迎えをえて、メリー・エルキントンは航海中の不安が消えたという。稲造夫婦が北海道に赴任する前、叔父は「メリーを連れて高級呉服店にゆき、絹の着物一重ねと帯、それに新渡戸家の家紋のついた羽織を彼女のためにあつらえてくれた。その家紋とは、月星の紋で、新渡戸家の先祖が北斗妙見を信仰したといういわ

れから、月星を家紋としたと伝えられたものである。』¹⁸⁾ 彼女に家紋のついた羽織をあつらえてくれたということは、新渡戸家の一員として認める気持ちでもあった。

太田時敏は、一時期東京で洋服屋を営んでいたことがある。

3-4. カーライルの「サーター・レザータス」

稲造は、早朝の読書を薦めているが「サーター・レザータス」(日本語訳 衣裳哲学)を命の親ともいうべき恩人と言っている。アメリカに帰る知人に頼んで譲って貰ったそうである。稲造は「サーター・レザータス」を30回以上読み10回程講演していると書いている。sartor とは仕立屋又は仕立て直しの意味で、sartor resartus というと、二度仕立てなおすの意になる。意味は、カーライルの深い洞察の許す洒落だと、私は考えている。私の場合、カーライルの難しい思考の展開を少しながら理解出来るのは、新渡戸稲造の講演の記録のお蔭である。

カーライルは「衣服とは何だ」と問い、人の衣服というものは脇からきたものだぞということを発見し、その時に初めて人間の悟りを開いた、と衣装論を書きたくなった理由を述べている。

「衣服が我々を蔽うてしまって、魂はなくなってしまってClotheばかりにして下ふのが恐ろしい。」¹⁹⁾

まさに、20世紀末の今を言うのかなと思うような言葉だが「とは雖も、まあそう心配しなくても…」²⁰⁾「人間が主となって衣服が一種のToolとなってしまうえば心配はない。人間が衣服のToolにならないで衣服が人間のToolとなれば心配ない。」²¹⁾と、鉦を収めている。

カーライルが、仕立屋と靴屋を比較しているところは、痛烈である。靴屋には哲学者が多いという。仕立屋に対しては、何か恨みがあるかと思うくらいである。仕立屋というのは職業中でも甚だ人間が伸びないものよ

うで、実に体が小さい、西洋のことだけのことだかと断りながら、犯罪者などは仕立屋に多い、と言及している。「Tailor というものは物を隠そう隠そうという仕事ばかりしているのだから、臭いものを隠したり、そして誤魔化したり、非常に力の無いものをえらそうに見せたりする嘘の仕事だから、これをやっているせいかどうか」²²⁾と。カーライルに反論する気持は毛頭なく、彼が sartor resartus という言葉を借りて、彼の哲学を語った事に、むしろ敬意を表したいが、ほんの少しだけ言わせて貰うなら、仕立屋を「非常に力の無いものをえらそうに見せたりする嘘の仕事」²³⁾と言われては可哀相すぎる。それは、着る人の問題であって、仕立屋の責任ではない。

残念ながら私は、人格には貴賤があると感じている派だが、職業には貴賤はないと考えているので、カーライルの考え方には同意出来ない。カーライルは権力者に対して非常な嫌悪を持っていたと、私は推測する。

又、カーライルは、鍛冶屋・靴屋・軍隊・大工・牧師などの前掛け(Aprons)を取り上げている。防禦が目的と言っているが、その防禦の意味は広く意味ありげだ。家事産業が盛んになり、主婦としての役割分担が少なくなればなる程、日本でのエプロン姿の母親像は幻となる。昭和初期の白い前掛けは日本独特の形態である。職業服としてのエプロンは、イギリスなどのデザイン画に古くから残されている。日本でも、明治初期のエプロンの環境は、新しい職業の台頭を思わせる。

3-5. 丁髷に洋服を着せたやうな男

驚いた。漂流記の彦蔵の髷を切られてしまった話ではおかしくて笑ってしまったが、まさか新渡戸稲造の中でも髷が出てこようとは考えてもいなかった。京都帝国大学教授の織田万は、稲造の追想文で「丁髷に洋服を着せたやうな男」とは適評だと記している。その意味を、伝統的な日本精神を飾るに欧米の新知識を以てする人であり、欧米の民情風俗に

精通し、その紹介に努むると同時に、その心の底には金鉄よりも堅き日本精神を持つと解説している。

彦蔵があんなに嘆き悲しんだのには、一理あったようだ。髷を今も育てているスポーツにお相撲がある。日本人でなくてもこのスポーツでは髷が要る。

4. 彦蔵と稲造

新渡戸稲造は日米関係史の「アメリカにおける日本人」という項のペリー遠征前の時代の人として、ジョセフ・ヒコ（彦蔵）について述べている。

「1851年に、海で遭難中をアメリカの帆船オークランド号によって救助された人たちの中の一人だった。彼はサンフランシスコで生活して、そこで英語と商業を学んだ。彼は、ワシントンや大西洋沿岸の諸都市に、数週間連れて行かれた。そして、1859年に米国を去って日本へ向かったが、日本では、帰化したアメリカ人として横浜で商人になった。これらの人々は、アメリカで遭難船員日本人としてとりあげられた数名のうちの若干名の事例だが、彼らに関する年代記は、あまりにも短かく簡単で、しかも大半の場合、本稿に収録するにはあまりにも無名な人ばかりである。」²⁴⁾と。

今、私の手元には、彦蔵の詳細な漂流記があるわけで、稲造がもし生きて目にすることがあったならと残念である。「あまりにも無名な人」と稲造に言わしめてしまったのは、情報伝達の少ない時代を象徴している。しかし、1862年生まれの稲造が46歳の1897年に、彦蔵60歳で死亡しているのだから、彦蔵の概ねの人生をよく把握している。

晩年、彦造は東本願寺で講話を聴いている。仏教開教使のことに関連していくのだが、次回で述べたい。

5. むすび

私は今回、予備知識を持たないで海外に出た人と、十分な知識と目標を持って海外に出た人の比較を目的としていた。中でも外国人女性と結婚して日本に帰った人たちを選び、その女性たちの日本における衣環境についても、考察したいと考えていた。しかしそれは、限られた枚数の中で、無謀なことであった。比較以前に調査すべき問題が山積し、軌道修正の必要が生じた。散漫になった記述は次回で補いたい。

私は、彦蔵がサンフランシスコで見た囚人服の黒人を鬼と考えた事に、昔噺を思い出し気になりだした。その後、新渡戸稲造全集第5巻（新渡戸稲造著 教文館）に桃太郎の話があるのを見つけた。稲造は桃太郎に関する書物を集め、「新渡戸稲造全集第17巻、第5章アメリカにおける日本人」の中で留学生や移民についての記録や推察を行っている。1866年に日本人として初めてアメリカへ留学した青年は出国許可を持たず、大型船や大砲を作る技術を学ぼうとしたのだが、英語を知らず所持金もわずかで、米国改革派教会外国宣教役員会の援助で留まることができたと、同役員会の手記を詳しく披露している。

その後1887年の統計では、在米日本人1352名の中、留学生は686名（男）と13名（女）で、稲造はその時、ドイツに留学していた。川に流れてきた桃を移民族と考え噺の意味を構築している。噺の意味を解すると解せざるとでは、子に話すにしても精神の入れ方が違うと指摘する。彦蔵の何気ない記録は、遙かなる人々の生きかたを示唆していたようだ。

彦蔵からは、予備知識をもたずに未知のことに出会ったとき、人間はどうするのかを考えてみたかった。その疑問に明快な答えを出してくれた。柔軟で同化しやすい体質に見えるが、母を亡くしていたことは、彼を日本に縛りつける理由がなくなり彼の心をフリーにしたのではないだろうか。

彦蔵の記録にも海での遭難は多く、サンフランシスコやハワイ（当時はまだ独立王国）香港などで、遭難者同志が面会している。日

本へも彦蔵と同じように遭難して来た人がある。1860年、浦賀からサンフランシスコに向かった咸臨丸には、日本の近くで遭難した11人のアメリカ水兵が乗船し、米国に帰った。その船には福沢諭吉も和服姿で乗船していた。世界の文化がそれらの人々によっても日本に伝来し、衣環境への変化は、記録に残らない人々の間でも動いていたに違いない。

彦蔵が救助された船上で、洋服を着せて貰ったとき「暖かさ」を上げている。当時の庶民階級では、恐らく木綿を着用しているのでラシャの着心地は冬に向かっていった救助船の上では天にも昇る思いであったに違いない。少し窮屈に感じているが、日本の着物の特色として、湿気が多い環境の中で、熱の放出がし易いように袖付けに「アキ」があり、それが動きやすさにもつながっているのだ。窮屈という言葉になったのだろう。彼は、体験しながら心地いいものを選択していったようだ。

彦蔵に比べ、6歳の男の子稲造は、既に洋風の雰囲気を経験していて、その知識故に、その環境ゆえに、鼓手として着る洋服に大きな期待と希望を寄せている。「西洋の偉大さ」を「この時代の私に」示したものと。

鼓手の洋服の素材として、アルパカなど最高級の布を使っているのは、羊毛が輸入されている証拠で感嘆に値する。

稲蔵は、日本のすぐれた文化も外国に伝え、理解し合うことだと言ひ、国際舞台での活躍や彼の言動がそれを証明している。

新渡戸稲造全集第1巻から第23巻と別巻のすべてに、稲造の写真が掲載してあり、それを見ているだけで面白い。どの一枚をとっても好感の持てる装いである。海外では洋装、日本では和装が多く日米交換教授の記念撮影では紋付きの羽織袴で凛々しい。同席のメイビー博士[◎]も足元は靴であるが、日本人かと間違える程の和装である。心のありか示しているような、衣裳がその人と寄り添うような自然な気品が出ている。

残念ながら、夫人の装いは写真で見るとかぎり洋装である。残念ながらと言ったのは、私

見であるが、一般に文明の高い所へ移動する場合はそこに同化しやすく、低い所へ行った場合は自分の文化を維持し簡単には同化しないと考えるからである。

結婚適齢期を迎えている頃に出会った異性は、生涯の伴侶となる可能性が強い。今回調べている中に、よりはっきりとした。新渡戸稲造も鈴木大拙も、外国にいて巡り合っている。国際結婚に伴う最大の困難は、言語の違いと生活程度の違いと思われる。当事者ふたりが互いの知的な喜びを分け合うとき、異なった風俗・習慣は比較的小さな問題であると稲造は言う。衣環境に関して実に見事に稲蔵夫婦は自分達の世界を確立している。

書き残されたものによって知ることは難しい。そこから私見を述べることは、難しく恐い作業のように始めは思えたが、目を通す程に考察の仕方に変化が生じた。その変化は、私が出会えた知識と智慧の賜物ではないかと思う。

1937年生まれの私は、彦蔵とは丁度一世紀の差がある。歴史の中に存在する自分を少しだけ感じることが出来るようになったのは、生きて証で、加齢による至宝以外の何物でもない。人間にとってそんなに長くはのぞめない珠玉のような「時」である。

軸に据えたいと考えていた由上美枝子については、私の不手際のせいもあって、書くスペースを無くしてしまった。ひとりの人を追うことにより見えるものを、次回で詳しく述べたいと思う。ドル（メキシコドル）と日本の通貨に関しては省略した。

文中、汗の出る思いで、敬称を略させて頂いた。

6. 年表

浜田彦蔵・新渡戸稲造・鈴木大拙・由上美枝子の年表 (概略)

2000.12.31現在

年	浜田彦蔵(ジョセフ・ヒコ)	新渡戸稲造	鈴木大拙	由上美枝子	世 事
天保 8 (1837) 嘉永 3 (1850)	誕生 幼名彦太郎 船で金比羅詣で。帰途 宮島へ。56日間の旅				大塩平八郎の乱
10月	江戸見物の帰り、遠州 灘にて遭難				12代将軍家慶の治世
12月 嘉永 4 (1851)	アメリカ船に救助さる サンフランシスコに入 港				ジョン万次郎、アメリ カ船にて帰国 明治天皇誕生
嘉永 5 (1852) 安政元(1854) 安政 5 (1858)	ハワイ島に寄港 洗礼を受ける ボルチモアで帰化 ア メリカ市民権を得る				日系アメリカ人第1号 安7. 咸臨丸サンフラ ンシスコへ(艦長勝海 舟)
安政 6 (1859) 万延元(1860) 文久元(1861)	旧友タンに会う 神奈川で最初の舞踏会 アメリカに再渡航				
文久 2 (1862)	南北戦争の最中、パナ マ経由で東部へ リンカーン大統領に会 見	文久2. 誕生 盛岡市			生麦事件
慶応元(1865) 慶応 2 (1866) 慶応 3 (1867)	リンカーンの暗殺知る 横浜から長崎へ 長州藩の代理人となる				リンカーン狙撃され、 翌朝死亡 慶2. 初めての留学生 米国へ
明治元(1868)	兵庫県知事伊藤博文と 歓談 故郷に帰る				
明治 4 (1871) 明治 5 (1872)	故郷で墓石の除幕式 東京 大蔵省に出仕 会計局に属す	叔父の養子になり上京 明6. 京外国語学学校入学 明10. 札幌農学校入学			明4. 廃藩置県 津田 梅子 (6歳) 米国へ留 学 明10. 西南の役終
明治 6 (1873) 明治 8 (1875) 明治10(1877) 明治11(1878)	茶の輸出 結婚?松本銀子(18歳) 神戸に在住	明11. 洗礼を受ける内 村鑑三・宮部金吾らと 明13. 「サーター・レ レザータス」入手	明8. 誕生 金沢市		明14. カーライル没 明16. 鹿鳴館開館
明治13(1880) 明治13(1881) 明治17(1884) 明治20(1887) 明治20(1888) 明治22(1889)	蒸気式の精米所設立 知事招待の大舞踏会 東京に転住 東本願寺で仏教の講演 を聴く	明14. 札幌農学校卒業 明17. 東京大学退学米 国の大学に入学10月か らドイツで農政学、農 業経済学 明24. フィラデルフィ アで米国女性と結婚 日本に婦人と共に帰国 札幌農学校教授 明27. 遠友夜学校創設	明23. 上京		明24. 濃尾大地震 明27. 日清戦争 明32. 帝国憲法発布 明37. 日露戦争
明治24(1891) 明治25(1892)	10/28 濃尾大地震の 記述で終わる				
明治30(1897) 明治32(1899) 明治33(1900) 明治36(1903) 明治39(1906)	没 (心臓麻痺60歳) 青山外人墓地	明32. 農学博士(第1号) Bushido 米国で出版 京都帝大法科大学教授 第一高等学校校長 清国 韓国に出張 法学博士	明28. 東京帝国大学 文科大学哲学科選科修 了 明30. 渡米		明42. 濃尾大地震 明45. 明治天皇崩御 乃木大将殉死 大3. 第一次大戦始 大7. 第一次大戦終 米騒動 大12. 関東大震災
明治43(1910) 明治44(1911)		ファウスト物語、出版 日米交換教授 渡米	明42. 帰国 東京大学 講師 明44. アメリカ女性と 横浜で結婚 大5. 夫人の母来日、 以後同居 大10. 真宗大谷大学教 授 昭2. 夫人の母没	明43. 誕生 岐阜県揖 斐郡	明42. 伊藤博文暗殺さ る 明45. 明治天皇崩御 乃木大将殉死
大正 7 (1918) 大正 9 (1920)		東京女子大学初代学長 国際連盟事務局次長ジ ュネーブへ	昭2. 夫人の母没	昭3. 揖斐郡北方小学 校訓導	大3. 第一次大戦始 大7. 第一次大戦終 米騒動 大12. 関東大震災
昭和 8 (1933) 昭和 9 (1934)		昭8. ビクトリア市で没 (72歳) 多摩墓地	昭14. 夫人没	昭6. 結婚 大阪へ 昭9. 渡米	昭8. 国際連盟脱退 昭16. 太平洋戦争始ま る 昭20. 敗戦
昭和24(1949) 昭和41(1966)			渡米 昭41. 没 (96歳) 東慶 寺・高野山・金沢	昭17. 敵国外人とシワ イオミング州ハートマ ウンテンに強制収容さ る 昭24. 鈴木大拙ロサン ゼルス別院に滞在 由上一家と生活	
平成12(2000)				カリフォルニア州在住	シドニーオリンピック

引 用

- 1) アメリカ彦蔵自伝1 東洋文庫 中川
努・山口修訳 平凡社 1964年 P.62
- 2) 同 上 P.62
- 3) 同 上 P.62
- 4) 同 上 P.62
- 5) 同 上 P.63
- 6) 同 上 P.63
- 7) 同 上 P.20
- 8) 同 上 P.57
- 9) 同 上 P.26
- 10) 同 上 P.26
- 11) 同 上 P.71
- 12) アメリカ彦蔵自伝2 東洋文庫 中川
努・山口修訳 平凡社 1964年 P.260
- 13) 同 上 P.260
- 14) 同 上 P.262
- 15) 新渡戸稲造の生涯 須知徳平著 熊谷印
刷出版部 昭和58年 P.23
- 16) 同 上 P.24
- 17) 同 上 P.24
- 18) 同 上 P.74,P.75
- 19) 新渡戸稲造全集 第9巻 新渡戸稲造著
教文館 P.58
- 20) 同 上 P.58
- 21) 同 上 P.58
- 22) 新渡戸稲造全集 第9巻 新渡戸稲造著
教文館 P.174
- 23) 同 上 P.174
- 24) 新渡戸上造全集 第17巻 新渡戸稲造著
教文館 P.529

注

- (A) 当時の天皇誕生日は11月3日
- (B) 高橋悌三博士 (1897~1987) 農学博士
東海女子短期大学学監・初代東海女子大
学学長
- (C) ハミルトン・ライト・メイビー博士 (1845
~1916) アメリカの著述家

参考文献

- ・日本旅行日記1・2 アーネスト・サトウ
庄田元男訳 平凡社 1992年
- ・纏足をほどいた女たち 夏曉虹著 藤井省
三監修 朝日選書 1998年
- ・新渡戸稲造全集第1巻~第17巻 新渡戸稲
造著 教文館
- ・イエロー 渡辺幸一著 光出版社 平11年
- ・私の歩んだ道+被服構成学の半世紀 柳沢
澄子著 昭和印刷株式会社 1992年
- ・写真に見る日本洋装史 遠藤武・石山彰著
文化出版社 S57年
- ・図説・昭和の歴史4 大陸制覇への夢 堀
内末男著 集英社 昭55年
- ・船に見る日本人移民史 山田迪生著一公
新書1441 1998年
- ・老化はなぜ起こるか S/N. オースタッド
著 吉田利子訳 草思社 1999年
- ・近代化と日本人の生活 国學院大学日本文
化研究所 同朋舎出版 1994年
- ・東洋的な見方 鈴木大拙禅選集第11巻
鈴木大拙 春秋社 1992年
- ・にっぽんダンス物語「交際術」の輸入者た
ち 永井良和 リプロボート 1994年
- ・小泉八雲とカミガミの世界 平川祐弘著一
芸春秋 1988
- ・日本の名随筆②相撲 吉村昭 作品社
1991年
- ・江戸期の童話研究 上 笹一郎編 1992年